

1998年2月

口 演

S-257

267 経腔超音波断層法による着床前期子宮内膜像の臨床的評価－妊娠例と非妊娠例の比較検討－

藤保大

黒木 道、廣田 穂、塚田和彦、大原 聰、
佐藤匡昭、奥村貴子、吉田麻里子、荻野博司、
白木 誠、多田 伸、河上征治

[目的] 経腔超音波断層法により観察される、①子宮内膜容積（体積）の変動と②子宮内膜蠕動様運動の活動性が妊娠に寄与する因子か否かを、妊娠例と非妊娠例で比較検討した。[方法] 対象は、着床前期：-3～±0 day（超音波上の排卵日=day0）に経腔超音波断層法で子宮内膜容積（体積）と子宮内膜蠕動様運動を同時測定した136例188周期（妊娠例23周期；以下妊娠群、非妊娠例165周期；以下非妊娠群）とした。子宮内膜容積は、修正子宮内膜体積（以下MEV）=子宮内膜体積/子宮体部体積(比)で算出し、また子宮内膜蠕動様運動（以下PME）は、規則的な蠕動様運動が30秒間に1回、2回、3回認められたものを各々1+、2+、3+とし、不規則な運動のみ観察されたものを±、蠕動運動の全く認められなかったものを-とし評価した。経腔走査は、ソノビスタ-EX（セクタ方式、周波数 6.0MHz）を用い、同一検者、同一条件のもとに行なった。[成績] 着床前期におけるMEV値を妊娠群と非妊娠群で比較したところ、妊娠群 27.1 ± 4.6 、非妊娠群 20.7 ± 1.2 と妊娠群でMEVが高値を示す傾向が認められた。またMEVとPMEの活動性との関係では、MEVが高値を示す症例において活発なPMEが観察されたが、妊娠群と非妊娠群との間にはPMEの活動性に差異を認めなかつた。[結論] 妊娠群では非妊娠群に比し、MEVが高値を示す傾向が認められたことから、着床前期の子宮内膜の量的増加は妊娠に寄与する因子の一つであることが示唆された。またPMEは、超音波断層法でのみ観察される現象で、その生殖生理上の意義は十分解明されてはいないが、今回の検討ではPMEの活動性と妊娠の成否との間には一定の傾向を認めなかつた。

268 パラフィン包埋切片を用いた Comparative Genomic Hybridization による子宮体部腺癌の遺伝学的变化の検討

山口大

末広 寛、村上明弘、坂口優子、尾崎秀信、繩田修吾、
住浪義則、沼 文隆、加藤 紘

[目的] 全染色体上の遺伝子コピー数の異常を一回の hybridization により評価できる comparative genomic hybridization (CGH) が報告されている。しかし従来の方法は新鮮凍結標本を用いたものであり、今後より効率的に臨床病理学的評価の検討を進める上でパラフィン包埋切片を用いた CGH 法の確立は重要である。今回我々は上記手法の確立を目指し、 microdissection、DNA の抽出、蛍光標識および hybridization について検討を加え、子宮体癌症例における遺伝学的变化の検討を行なったので報告する。[材料・方法] 3 例の子宮体癌症例を対象とした。同一患者より手術切除によって得られた原発巣、リンパ節転移巣、再発巣の検体を 10% 非緩衝ホルマリンにて固定後、パラフィン包埋した。パラフィン包埋ブロックを薄切り、キシレンにて脱パラフィン後、HE 染色を行い、実体顕微鏡下に癌組織を採取した。得られた組織を Proteinase K 処理後、PCI 法にて DNA を抽出し、nick translation 法にて蛍光標識後、CGH 解析を行なった。[成績] 3 検体に共通する変化として 1 番短腕および 19 番染色体領域における相対的遺伝子コピー数の減少、3 番長腕の染色体領域における相対的遺伝子コピー数増加が認められた。原発巣と比較して転移巣に特徴的な変化として、3 番長腕の染色体領域における、より広い範囲にわたる相対的遺伝子コピー数増加を認めた。さらに再発巣に特徴的な変化として 15 番染色体領域における相対的遺伝子コピー数の減少が認められた。[結論] 今回遺伝学的变化が認められたこれら染色体領域上には、子宮体部腺癌の発生、組織特異性、転移、浸潤、抗癌剤耐性などに関わる遺伝子群の存在する可能性が示唆されるため、予後との関連などにつき症例を重ねて検討中である。